未来Watch
みらいウォッチ

2021 秋号

2021年4号　No.7
ニッケ教育研究所　会報誌

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティー

特集

私がつくる子どもの笑顔　第3回

自信と誇りを持った大人たちが創る学校が子どもたちを笑顔にできる！

～ みんなが光り輝く〝学びのコミュニティー〟を目指して ～

教育環境を考える

教育環境は“3層のゆりかご”

インフォメーション

特別講演動画公開のお知らせ
「第２弾 親子のふれ合いを通して深める学び」

※写真は、ダリアです。

一般社団法人
ニッケ教育研究所
NIKKE Institute of Education

〝誰も置き去りにしない〟
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために

ニッケ教育研究所

インフォメーション

特別講演動画公開のお知らせ

笑顔で明るくて、 子どもたちが話しかけやすい！ 大人たちがそんな存在になり、 環境をつくることが大切です。
会話やふれ合いを通して子どもたちと一緒に学び、 互いに深めていくことの素晴らしさを実感できるお話です。

ホームページで「講演動画」公開中！

特別講演

「第２弾 親子のふれ合いを通して深める学び」

講師　森川 正樹 先生《関西学院初等部 教諭》

教育関連の身近なお話を紹介する「コラム」も随時更新中です。
ニッケ教育研究所のホームページを、是非ご覧ください。

https://nikke-edu.org/

一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけませんか？
子どもたちは“未来の宝”です。 私たちが発信する未来の宝を育む情報を、 学校・家庭・地域で是非ご活用ください。 入会のお申し込みは、 ホームページでご案内しています。

編集後記

世の中には変えることができるものとできないものがあります。過去に経験した事実は変えることができませんが、その経験の捉え方を変えることはできます。辛い経験もそこから学んだことや少しでもポジティブな面を考えることで気持ちが整理され、次の行動への意欲が湧いてきます。また、他者を自分の思うように変えることはできませんが、他者に対する自分の関わり方を変えることはできます。自分が関わり方を変えることで影響を与え、少しずつ相手が変わっていくことがあります。そして、ありたい未来を描いて行動していくことで未来を変えることができます。ありたい未来につながる行動を日々継続することで確実に近づいていくことができます。変化の激しい時代で先が見えないことに不安を感じますが、子どもたちが「変えることができるもの」に意識を向け、恐れずにチャレンジできるようなサポートをしたいと考えます。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長　楠本　景央

未来Watch みらいウォッチ
2021 秋号（年４回発行） No.7
2021 年 10 月 20 日 発行
本紙掲載の記事は、複写・複製・転載を禁じます。
《発行》 一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町３丁目 3-10
TEL: 06-6205-6665　https://nikke-edu.org/

私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざして、現場ではさまざまな創意工夫が行われています。「私がつくる 子どもの笑顔」では、現職の校長先生に学校づくりの考え方や具体例を紹介していただき、子どもたちを育む学校環境についての意識を深めていきます。
第3回は、大阪市立加美小学校の吉岡哲郎校長です。

第3回 自信と誇りを持った大人たちが創る学校が子どもたちを笑顔にできる！

～ みんなが光り輝く〝学びのコミュニティー〟を目指して ～

《大阪市立加美小学校》 吉岡（よしおか） 哲郎（てつろう） 校長

日本の先生たちは、なんて素晴らしいんだろう！ ――― 2014年4月に大阪市の民間公募校長としてスタートするまでの10年間、ドイツ・ミュンヘン日本人国際学校（小中一貫校）の事務局長・理事として学校教育に携わりました。日本全国から派遣された先生方と共に働く機会がありましたが、その教育実践や創り出す教育環境に、日本の先生方の素晴らしさを強く感じていました。しかし、先生・保護者の皆さんはそのことに気づいていないのです。私は帰国し、学校現場を通じて日本の人たちにそのことを伝え、勇気づけたいと思いました。そして、子どもたちが笑顔になるには、大人たちが自信と誇りを持つことが何より大切との想いは強くなるばかりです。

一隅を照らす

一人の放つ光はどんなに小さくても、何千何万と集まれば世界は光り輝く・・・。それゆえ、一人ひとりが自らの場所で、自らの使命に力を尽くすとき、その光のひとつひとつが尊いのです。私は「そんな光の一つになりたい」と思い、子どもたちには「そんな光が君たちなんだよ」と伝えたいと思いました。

校長になって８年、想いは少しだけ形を変え、一人ひとりが「私たちは光なんだ」と気づくための〝学びのコミュニティー〟を創りたいと思うようになりました。今年度は、「成長の喜びと挑戦」「本当の自信」「真理を求める姿勢・誠実さ」――― そんな自信と誇りを持った大人たちが創る学校で子どもたちを笑顔にしたいと、**みんなが光り輝く〝学びのコミュニティー〟**を意識した学校運営を進めています。

成長の喜びと挑戦！

今年度の入学式の式辞で、こんなご挨拶をしました。

お母様、 お父様にお願いがあります

お子さんが赤ちゃんだった頃を思い出してみていただけますか？お母様が差し出した親指を、もみじのような小さな手がぎゅっと握り返したときのこと。最初に「ママ」と言ったときのこと。ひとつひとつに「すごいぞ！よくできたね！」と歓声をあげたこと。喜びとともに、大きな幸福感に包まれていたのを覚えていらっしゃると思います。ところが小学生になると「一年生になったんだから」とか、「もっとできるでしょ」とか言ってしまいがちです。そんなとき、あの頃の幸福感を思い出してみませんか？私は、一人ひとりがそれぞれに**確実な成長の喜びを実感できる**、そんな幸福感に満ちた学校にしたいと考えています。保護者の皆さんも、いっしょに創っていただければ嬉しいです。

ファーストペンギンになろう

ペンギンは、群れを作って生活をしています。そして、魚をとるために一斉に海に飛び込みます。実はこのとき、最初にたった一羽で飛び込む勇気あるペンギンの存在があるのです。名付けて「ファーストペンギン」。誰かが飛び込むからではありません。**自分の意志で、自分で決めて挑戦する**ファーストペンギンがいるからこそ、あとのペンギンたちも飛び込むことが出来るのです。校長先生は、皆さんにファーストペンギンのような人になってほしいと願っています。

本当の自信

――― 誰が置いてくれたのでしょうか。教卓に一輪の花がありました。先生は、この花を置いてくれた子の優しさと、誇らしげに言ってこないことに感動しました。自慢したり、言いふらしたりしない「心」。立派な人になると思います。皆さんも見習いましょう。 ――― これは私が小学生の時、1970年代の出来事です。私の教育観を形作った原体験でもあります。立派な人とは、正しいこと・他人のためになることを、誰に評価されるわけでもなく人知れず行う人のことを言うのではないでしょうか。ちなみに、私はこのような行動ができたとき**「本当の自信」**を持てたと感じています。**「誰も見ていないところでも心を正しくする」**という姿勢は、学校で伝えたいことの一つです。

「本当の自信」を持った大人になりましょう！

真理を求める姿勢・誠実であること

「真理を求める姿勢・誠実であることは、なによりも大切である」とされた時代に私は育ちました。これは、人格を磨いていく上で重要な教えではないでしょうか。

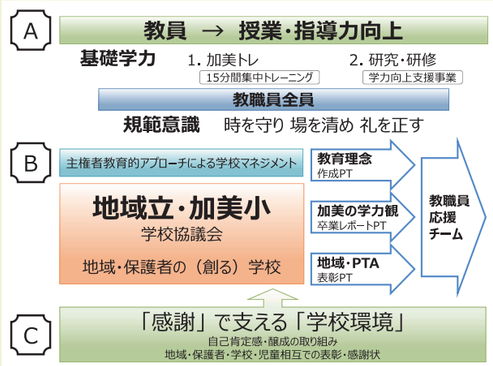
「論ずる事、信ずる事が正反対であっても、心誠に、真理を求むる者は、皆兄弟、皆同志」（注１）この新渡戸稲造（1862-1933年、教育者・思想家）の言葉からは、相手を信じようとする祈り・願いを感じます。何より自分自身が、**真理を求める者として在り続けようという強い意志**を読み取ることができます。今世間では様々な事案で議論が白熱し、まさに甲論乙駁（こうろんおつばく）。そんなときでも、ともに真理を求める兄弟・同士であることを忘れず、未来において「お互い頑張ったね」と言い合える関係でありたいと願うばかりです。

「真実の道は、一体いかにして興るものでしょうか。それには、『自分が道をひらくのだ』というような一切の野心やはからいが消え去って、このわが身わが心の一切を、現在自分が当面しているつとめに向かって捧げ切る『誠』によってのみ、開かれるのであります。」（注２）これは、天王寺師範学校の教師であった森信三（1896-1992年、教育者・哲学者）の講義録にある言葉です。**誠実であることが真の力になる**――― 私も含めて教師・みんなへのエールでもあります。

（注１）「新渡戸稲造全集第八巻」新渡戸稲造著、教文館、410ページから引用。
（注２）「修身教授録」森信三著、到知出版社、250ページから引用。

「地域立の学校」

日本のコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の運営手法を、かつてミュンヘン日本人国際学校でも参考にしていました。その時の経験を活かし、形だけではない**「地域立を意識した学校協議会」**を目指しています。一人ひとりが「私たちは光なんだ」と気づける〝学びのコミュニティー〟を**「地域立の学校」**と名付け、地域・PTAの皆さんと協同しながら取組を始めています。



2021年度（令和３年度）大阪市立加美小学校グランドデザイン →
※ 表中のPTは、プロジェクトチームの略。

おわりに

本校には、コロナ禍であっても教育への熱意が一切衰えることのない教職員がいます。まさに、ミュンヘンで出逢ったあの先生たちの姿と重なります。今、校長としての喜びは、この素晴らしき仲間たちとともに、子どもたちが笑顔になる学校づくりに参加できることです。

1921年（大正10年）に制定された「大阪市歌」。私はこの歌の、特に３番が大好きです。自分を育んでくれた場所を受け継ぎ発展させ、次世代に繋いでいく務めが私たちにあるのです。私を仲間として迎え、こんな素晴らしい機会をくださった大阪に「感謝」です。

大阪市ホームページ、市歌（ページ番号：28864）から引用 →

大阪市歌（３番）
作詞 堀沢周案

東洋一の商工地
咲くやこの花さきがけて
よもに香りを送るべき
務ぞ重き 大阪市
務ぞ重き 大阪市

教育環境は“３層のゆりかご”

子どもたちが夢を描いてチャレンジし、思う存分に力を発揮できるようにサポートするのは大人たちの大切な役割です。ここでは2021春号に続き、子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる「教育環境を整える・つくる」ということについて、教育現場での知見に基づいて掘り下げてみます。

３者の理想的な姿“混然一体”を目指して

《ニッケ教育研究所顧問》勝本（かつもと） 孝夫（たかお）　元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

はじめに

コロナ禍の影響で地域やPTA主催の催しが、中止や延期・縮小を余儀なくされています。しかし、これまで当たり前だったことができなくなったことで、それらの催しは、子ども・保護者・地域と学校とをつなぐための“なくてはならないイベント”であることが浮き彫りになったと思います。

３者をつなぐ「共に汗を流す姿勢」

2021春号で、家庭と学校（学級）と地域とが混然一体となって、“あたたかいむすびつき”が生まれたならば、教育環境全体が“思いやりとやさしさ”に包まれた“３層のゆりかご”（図1）になると述べました。それを実感した出来事をご紹介します。

私が教頭を務めていた頃の出来事です。毎年８月になると、小学校で地域主催の“盆踊り大会”が行われていました。この盆踊り大会の特色は、着ぐるみで踊る“仮装踊り”が演目にあることでした。地域の方や保護者、そして子どもたちは、用意された動物やアニメキャラクターなどの着ぐるみで参加するのでした。着ぐるみといっても顔の部分だけは見えるようになっていて、誰が着ているかが分かるものです。そのため、教職員はどうしてもそれを着て踊ることに躊躇するのでした。そんな様子を見つめていた私のところに、地域のある方が“お猿の着ぐるみ”を持って近づいて来ました。「教頭先生もこの着ぐるみで踊ってもらえませんか。地域や保護者の方もきっと喜ぶと思います。今まで学校の方はだれも着てくれなかったんです」と言われました。私はこの依頼に“心の叫び”にも似たようなものを感じ、地域の方が喜んでくださるならと、“よし！えい！やあ！”との思いで、「分かりました、着ましょう！」と即答したのです。さて、勇気を振り絞って“お猿の着ぐるみ”を着て踊りはじめてはみましたが、非常な恥ずかしさを感じていました。

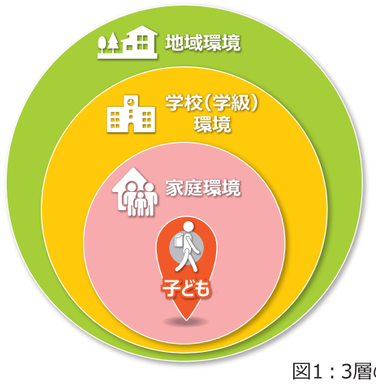


図1：3層のゆりかご

やがて、踊りを取り囲んでいる地域の方・保護者・子どもたちから、「うわぁ、教頭先生がお猿を着て踊っている！」「見て！見て！お猿の教頭先生や！」の声。しかしそのとき、なんと子どもたちが私の後ろについて踊り始めたのです。私は踊りながら、“この着ぐるみのおかげで地域と学校が一体になった”と実感し、嬉しさが込み上げてきました。“お猿の着ぐるみ”を着て踊るという“共に汗を流す姿勢”によって、３者（地域・保護者・学校）の壁を突き破り一体化することができたと、今しみじみと思います。まさに、“お猿の着ぐるみ”が３者をつないだのです。

教職員への「感謝の想い」

多くの小学校には、「PTAママさんバレーボール」や「PTAソフトボール」等のクラブ活動があります。それらのクラブ活動には学校の先生方も参加して、土日になると練習や試合が行われます。私が校長を務めた小学校でも、何人かの先生方には、休日を返上しての練習や試合に参加していただきました。私は可能な限り、その様子を見に出かけました。そして、「貴重な休みを返上されての先生方のおかげで、ＰＴＡと学校との関係は円滑に保たれている」と感じました。また、「バレーボールやソフトボールでチームメイトと同じユニフォームを身につけ、プレーするという“共に汗を流す姿勢”のおかげで、PTAと学校が“混然一体”になっている」と、私の教頭時代の“お猿の着ぐるみ”と重なり、心から感謝する想いで先生方の溌剌（はつらつ）としたプレーを眺めていました。

スポーツのクラブ活動に限らず、地域・保護者が中心となった催しは年間を通して数多くあります。それらの催しにも、休日を返上して多くの教職員の方々が参加してくださったことに、今になっても感謝の想いは尽きません。

「利他の精神」と「グランドデザイン」

コロナ禍の再拡大、相次ぐ自然災害の発生など、私たちの生活を脅かす状況が続いています。そのような状況におかれて、「利他の精神」という言葉をよく耳にするようになりました。個人的には「利他の精神」がこれからの世の中での“キーワード”になると感じていますが、教職員の方々が休日を返上して地域・保護者とつながることは、「利他の精神」そのものであると思えてなりません。ただ、ここで再確認したいのは、真の「利他の精神」とは自己犠牲でもなく、自己中心でもないという捉え方です。地域・保護者と教職員にとって共に“意味のあること”、まさに“ウィン・ウィン”という捉え方です（図2）。ともすれば、教職員は「休日を返上して“あげている”」という気持ちになる恐れがあります。また、地域・保護者は「教職員はもっとたくさん参加“すべきだ”」との思いになってしまうものです。しかし、そう思うのは至極当然な心情です。教職員の方にとっても、地域・保護者の方にとっても、休日は「大切な時間」であることに違いないからです。

では、この双方の心情を乗り越え、共に“意味のあること”“ウィン・ウィン”の心境に昇華させるにはどうすれば良いのでしょうか。それには、３者の関係性を構造的にきっちりと明記し、理解を共有することが大切です。子ども中心の学校づくりを描いた「グランドデザイン」が、“ウィン・ウィン”の心境に昇華させるカギを握っているのです。

変化のスピードが速く、未来を予測するのが難しい今の世の中です。そんな中、学校が家庭と地域をつなぐ“キーステーション”の役割を果たしながら、どんな未来を目指すのか・・・。３者が子どものために力を合わせて目標に向かう、「利他の精神」を以っての「グランドデザイン」を創り上げ、そのビジョンを共有することが一層重要になってきています。今後の学校運営は、「グランドデザイン」なくしてはあり得ないのではないでしょうか。

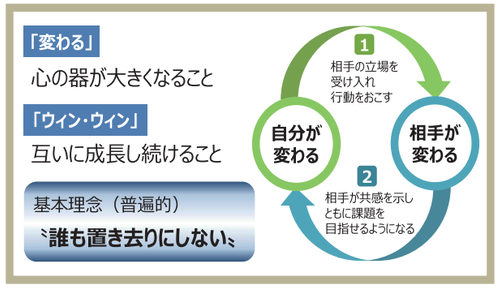


図２：「利他の精神」のイメージ

希望に向かって

先日、ある校長先生が次のようなことを言われていました。

――――「確かにこのコロナ禍は、児童や教職員の感染状況に神経を使いながらの苦しい毎日です。しかし、この状況下だから私の学校の課題もよく見えてきて、そこに向かって乗り越えて行こうという意欲も湧いてきます。なにより、この困難な状況だからこそ、教職員の皆さまの心がひとつになって、団結する姿が見えるようになりました。まさに、“ピンチは、チャンス”だと感じています。」

長いトンネルも、いつかは出口が見えてきます。暗黒の夜も、いつかは明けるときがきます。教職員の皆さまが力を合わせて、「どうか、この危機的状況に負けないで、みごとに乗り越えて欲しい」「必ずや訪れる“希望”に向かって、日々励まし合いながら、着実に歩んで欲しい」と願わずにはおれません。